

第 1 話：ボクと仔猫と …

(1)

さて、音楽創作の理想郷といわれ、吟遊詩人こそが、万物の霊長であると闊歩しているミュズガルド界、最大の大陸、アマデウス大陸のはるか東方にその国、神奏日本はあった。その科楽庁で秘密裏に創（つくられ）られている楽器は、究極の楽器といえた。いや、正確には、究極の楽器となる予定の機体は、先の大戦での主力兵器だった人型の対防衛戦術型音響兵器 APA (Android of Phono-Aegis) – V_02 を、元に、マスターとなる人の思考、趣向、及び、感情をトレースして、好みにあった思い通りの曲を奏でるといふ、音楽のセンスが無くとも、誰でも平等に、音楽創作が楽しめるという機能を持ち合わせていた。この機能があれば、少なくとも、今まで、音楽の才能が無く、1%の吟遊詩人から、最下層民と差別されていた、99%の多くの民が救われることになるだろう。この世界は、如何せん、全人類1%の吟遊詩人の権力が高すぎる。

「それにしても、すごいことを考えるものだな。禁忌だろうに。」

現在、その最終調整に入りながら、科楽者の一人が、小声で呟いた。

「もうすぐ、完成だ。伝説の歌闘姫。
MIKUHATSUNE。」

その名を知らないものがないと言われ、偶然ではあったが、略称が、神話上の歌姫と同じ名称を与えられた、その楽器は少女の形をしていた。

「ああ、いにしえに存在したといわれる
伝説の歌闘姫。ミク・ハツネ …。我らの
神話に伝わる天使の旋律。あんじえのーと」

科楽者たちは、この長き年月の努力を思い、慨嘆した。錬金術の粹を極めた彼らの美術品は、紅のエリクシルに満ちた 巨大な蒸留ビンの中で、彼女の元型（アーキタイプ）に順ずる脳内パルス、人工頭脳に与えられていた。目覚めるための雷電が、蒸留ビンの中の彼女に伝わり、そのたおやかな身体が 二、三度ほど、びくんとはねる。それでも、めざめないため、幾度か電気ショックを繰り返して、

ようやく、目覚める気配がする。

「反応ありました。エリクシル、排出します。」

アルベドに熟成された、大量のエリクシルの奔流とともに、
彼女は初めて外界へと飛び出した …。

成功するかにみえたそのとき、科楽庁の構内に、エマージェンシーコールが鳴り響き、電子音が連呼する。

「ノイズが発生しました。ノイズが発生しました。ノイズが…」

アマデウス大陸にのみ、跋扈しているはずの、ノイズという名の謎の邪悪な存在が、今に完成しようとしている彼女の存在を感じ取り、邪魔な科楽庁を、壊滅させんがために、発生したらしかった。そう、ノイズは、いずれともなく、発生する存在として、この世界の人たちに、忌避されていたのである。

「やばい！」

咄嗟に、科楽者の一人が緊急ボタンを押すと、ようやく、外界に出たそれは、いつこかへと消滅した。突如として発生したノイズに、襲われた科楽者たちは、騒然となる。暴れまわるノイズたちが、この世界を改革しようとした科楽庁を崩壊させるのに、そう、時間はいらなかった。

(2)

ここ、某県、笙野市は、近隣の都道府県からは、住みやすいと評判の市町村である。現在、午前、六時。人通りは皆無かと言えば、化粧もそこそこに、早朝出勤する女性や、夜勤明けなのか、疲れた表情で帰宅する男性、朝連に向かう、学校指定のジャージ姿で、ランニングをしている学生。店の前を、シャッターを開き、舗道を清掃している店員と、なかなか賑やかな様相を、ここ、JR笙野駅の前に広がる、緑豊かなタイル舗装の広場。通称、笙野プレリユード通り広場は、呈している。そこに、これも毎朝、見慣れた風景の、人里に慣れた鳥たちが、電信柱の真上や電線を切るほどに、弛(たゆ)ませながら、繁華街に、立ち並ぶ数々の店舗から排出される、彼らにとっての大量の餌が入った、市から企業や一般家庭に向けて、有料で供出されている、有機化合物製の透明な膜

に、一斉に狙いをすましている中、ふいに、ハウリングを伴ったエレキの大音量が鳴り響き、彼らは、一斉に飛び立った。音源は、広場に仰々しく置かれたアンブー式から出ている。

「うっせえぞ！このオンチ！」

その前で、エレキ片手に歌っている少年に、通りがかりの、徹夜明けの酔っ払いが、飲み終えたビールの空き缶を投げつけて、ずきずきと痛む頭を、辛そうに押さえながら、不機嫌そうに立ち去っていく。

「いってえなあ！こんにゃろお！」

少年は、歌を中止して、酔っ払いと大立ち回りをしていると、ここら辺りでは、顔が利く、近所の老舗の食堂のおばちゃんが、仲裁に入ってくる。

「こらっ！あんたたち、いいかげんにしないかい！
特に、唱坊！」

「なんで、俺だけなんだよ！おばちゃん。」

唱坊と呼ばれた少年の耳を引っ張りながら、割烹着姿の人のよさそうな中年女性は、酔っ払いに丁寧に謝罪をすると、ずるずると、男と引き離すように、引っ張っていく。

「いいから、おいで。
済みませんねえ、この子が迷惑かけちゃったみたいで。」

「ちっ！気をつけな。」

短く捨て台詞を吐くと、男は立ち去っていく。

「ちょ！悪いのはあっち…。サトさん。」

そんな少年、移調 唱太（イチョウショウタ）に、
長年、笙野駅の前で、食堂を切りもってきたサトは、
彼の指定の場所で、傷の手当をしながら、諭すように言った。

「唱坊。いくら、悪くても、けんか腰はよくないよ。
唱坊の夢は、いつか、プロの歌手になることだろ？
あの人だって、ファンになるかもしれない。」

まあ、カラス避けになってくれてるし、あたしは好きだよ。
と、フォローになってるのか、なってないのか分からない言葉を残して、
彼女は、時間だからと、店へと去っていた。

(3)

それから、数時間後。人通りは多くなったが、唱太は、かなり不機嫌だった。
あれから移動し、駅前から、五百メートル離れた祠の前で、
聞いてもらおうと歌ってはいるのだが。

「ちくしょう。誰も振り向きやしない。」

自称、フリーのストリートミュージシャンの

移調 唱太（イチョウショウタ）は、ギザ 苛立っていた。

まあ、それも無理はない。

一ヶ月かかって、練り直した曲に、徹夜して引き続けても、
誰も耳を借そうともしないのだから。

せいぜい。仔猫一匹といったところだ、
その三毛のちびぬこは、
結局、最後までお座りして、聞いてくれている。

さきほど、うるさいと酔っ払いにどなられ、
ビールの空き缶を投げられたりもしたので、気分的には最悪だった。

「まったく。客がおまえだけというのなあ。」

「なあ～お ♪」

「お前の方が、歌はうまいな。」

唱太は、足元にじゃれ付く、赤いリボンを首に巻いた、仔猫を抱き上げて、頭をなでると、気持ちよさそうに、仔猫は目を細め、ぐるぐるとのどを鳴らしている。

「しゃーねーな。一緒に来るか？」

「なあ〜お ♪ 」

まあ、ゆくゆくは、メジャー進出、究極的には、売れた歌曲の印税でももらって、気楽に暮らすというのがモットーの彼は、持ち前の楽天さと諦めの早さで、エレキギターをケースに入れて帰ろうと、

五百メートル離れた駅を目指して、足を向けた。
空がしらみはじめている。

仔猫も、ちょこちょこと唱太の横をついてくる。
その仔猫が、不意に立ち止まり、天空を見上げてうなり始めた。

「ふうふううう！！」

「んっ…。どうした？」

もう、そろそろ、朝日が昇ろうとしている
東雲時（しのめどき）に、空の水色と
ラヴェンダー色と、柿色が交じり合う一瞬に、
天地を刺し貫く電光が、轟音とともに、辺りに響き渡った。

「な…。なんだあ?!」

いずれにしろ、徒事ではない。
あそこは、サトおばさんの食堂の近くでもある。

「やっば…。あそこ辺りは、おばさんの店の近くじゃんか。」

心配になった唱太は、ギターを片付けると、彼に懐いたらしい、
一匹の子猫と共に、音源がある駅前へと駆け出していった。

《つづく》